

2015年5月28日

放送倫理・番組向上機構（BPO）  
放送倫理検証委員会 御中

株式会社テレビ朝日

放送倫理検証委員会決定「“全聾の天才作曲家”番組に関する見解」への対応と取り組み

2015年3月6日の貴委員会からの決定を受けまして、弊社が行ってきた取り組みについてご報告いたします。

## 1. 委員会決定の放送対応

(1) 2015年3月6日、決定公表後、夕方のニュース番組「スーパーJチャンネル」で委員会の見解と弊社コメントを伝える放送をしました。

<放送内容>

耳が不自由な作曲家として活動し、後にゴーストライター問題が発覚した佐村河内守さんを取り上げたテレビ朝日などの民放とNHKの番組についてBPO＝放送倫理・番組向上機構は、放送倫理違反があるとまでは言えないとする見解を公表しました。

佐村河内さんを巡っては去年2月、ゴーストライターの存在や聴覚障害に関する問題が明らかになりました。

これを受け、BPOの放送倫理検証委員会は佐村河内さんの活動を扱ったテレビ朝日の「ワイド!スクランブル」など民放4局5番組とNHKの2番組について審理してきました。

その結果「放送倫理違反があるとまでは言えない」とした上で、

「なぜ虚偽の事実を真実であると信じてしまったのか」について「自己検証」と「要因を明確にする努力」を続けてほしいなどとする見解を示しました。

テレビ朝日のコメントです。

「今回の見解を真摯に受け止め、今後の番組制作に活かしてまいります。」

(2) 当該番組である「ワイド!スクランブル」では、見解公表後最初の放送日となった2015年3月9日に見解内容と弊社コメントを放送しました。

(3) 2015年3月15日、「はい!テレビ朝日です」(日曜午前5時00分~5時20分)で、見解内容と弊社コメントを放送しました。

## 2. 委員会決定内容の周知

- ・委員会決定公表直後、決定文を全報道局員と「ワイド!スクランブル」スタッフ、その他関係部署にメールで配布し、それぞれが内容を確認しました。
- ・報道局では各部署のデスクらが出席する夕方の打ち合わせで報道局長から経緯を伝え、決定の内容を再確認しました。
- ・報道局の部長、担当部長、各番組のチーフプロデューサーが出席する会議で意見書の内容を再確認し、各部署・各番組で共有するよう徹底しました。
- ・報道局関係者・各番組プロデューサーが出席する会議、また、報道局関係者・各番組・編成・営業・スポーツ・系列局・番組審査室・広報・法務担当者が出席する会議で委員会決定の内容を報告し、各部署でも共有するよう徹底しました。

## 3. 放送番組審議会への報告

2015年3月20日に開催した第558回テレビ朝日放送番組審議会において、弊社社長より審議会委員に対し、「BPOの放送倫理検証委員会が、全豊の作曲家として報道された佐村河内守さんについての5局7番組に対する見解を公表した。当社は『ワイド!スクランブル』が対象。放送倫理違反があるとまでは言えないという判断だったが、自己検証と要因を明確にする努力を続けよという要望があり、対応を検討している。」などと報告しました。

## 4. 委員会決定後の取り組み

貴委員会の見解には、テレビ朝日を含む民放4局に対し「視聴者の信頼を回復し、再発防止につなげる自己検証になっているのかについて、委員会は多大な懸念を抱からざるを得ない。4局の対応を見ると…だまされたのは仕方がなかったというところで、自己検証がストップしているように思われてならない」とする指摘がありました。その上で「視聴者に対する説明責任を果たしたとは到底言えないであろう。誤ったときに、誤りを訂正してお詫びするだけではなく、誤りの原因を説明してこそ、放送局への信頼が高まるはずである。4局には、自己検証の結果の公表を、ぜひ検討してもらいたい」という「要望」が示されました。こうした見解を受けて、テレビ朝日では、更なる自己検証を行う目的で勉強会

を実施し、視聴者にその結果を伝えるべく勉強会の様子を放送しました。

#### (1) 勉強会の開催

当該放送に関わったスタッフを含む報道局スタッフを主な対象に勉強会を開催し、この問題の発生を未然に防ぐことはできたのか、今後この種の問題を防ぐためにどんなことができるのかなど、幅広く議論を行いました。

勉強会には貴委員会の川端和治委員長と斎藤貴男委員にも出席いただきました。

#### <勉強会内容>

【日時】2015年5月18日14:30～16:30

【場所】テレビ朝日本社

【出席者】約110名

「ワイド!スクランブル」スタッフら情報・報道番組スタッフを中心に社内の番組制作関係者、報道局外の編成部、広報部等の社員など

#### 【内容】

##### ▽川端和治委員長の講演概要

委員会では、今回明らかに虚偽の事実によって多くの視聴者に誤解を与えたことは、やむを得なかったのかどうかを調べた。虚偽を見抜くのは難しかったであろうが、メディアの真実を見抜く能力が低いと実証してしまった。少なくとも視聴者はそう思った。

本当に虚偽であることを見抜く契機がなかったのか、テレビ局に振り返ってほしかった。そういう作業を通じて、同じ間違いを起こさないように教訓を得られるのではないか。それを視聴者に聞いてもらって、「テレビはもっと慎重な判断をするだろうから、テレビを信じてもいい」と思えるだろうと考え、意見書を書いた。

取材中・制作中にチラッと疑問が頭を横切る瞬間があったのではないか。例えば、佐村河内氏が母親への取材を拒否したり、作曲している瞬間を拒否した時など、少し変だということが「仕組まれたウソ」に気づくことができるかどうかにつながる。「ウォーニングサイン」を見逃してはいけない。それが報道する人の一番重要な心構えである。どうすれば見逃さないのか、今後色々研修するなどして考えてほしい。

多様な経験を積んで学んでいくことは自分の頭で考えながら感度を上げていくことでもあり、常に好奇心を持って見ていくことは細部まできちんと調べることでもある。事実を伝えるメディアになってほしいし、その努力をしてほしい。そして、その姿を視聴者に見せてほしい。

##### ▽斎藤貴男委員の講演概要

この問題を調べている間ずっと考えていたことは、番組の放送された2010年当時、自分は気づいて放送を止めるか、方向を変えるかなどできたかどうかだが、できた自信はない。

そもそも批判番組ではなく、こういう人がこれだけ頑張っているというポジティブな部分を伝える番組だった。批判的な番組ではなく、褒める内容の番組の時こそ危ないということを今回一番学んでほしい。安易な感動を求め、再現していないかということを考えてほしい。

ウラを取ることは大切だ。「他局がやっていた」「本が出ていた」だけでは不十分。例えば音楽業界関係者などの周辺取材で防げることもあったのではないか。ウラが取れそうにない、感情に訴えるようなストーリーには気をつけないといけない。

#### ▽パネルディスカッション

テーマ：「我々は『騙されたのは仕方なかった』を超えられるか？」

パネリスト：川端委員長、斎藤委員、テレビ朝日報道局次長（放送当時の番組チーフプロデューサー）、情報センターチーフプロデューサー（CP）、「モーニングバード」曜日チーフ、「グッド！モーニング」曜日チーフ

#### <ディスカッション概要>

##### ●報道局次長

企画から放送までの経緯としては、最初の企画提案が放送の3カ月前、5月頃にあった。まだそんなに世の中の的には知名度は高くない段階で、全聾で被爆二世である男性がすごい曲を作っているということだったが、ハンディキャップと関係のないところでどれだけ素晴らしいのか描くことは難しいと一回却下した。その後別のディレクターからも同企画の提案があり、水面下で取材を続けていた。6月にも再提案があり、「人間一滴」のコーナーで8月に広島の前原爆記念日に終戦特集として放送するのがふさわしいということでOKを出して取材開始ということになった。佐村河内氏本人の取材を含め、相当時間をかけて相当丁寧に取材してきたと思っている。

##### ●川端委員長

ディレクターが佐村河内氏にほれ込んで、というのは他局も同じで、プロデューサーなどの立場では、入れ込んでいるディレクターの問題をどう乗り越えるかということではないか。

##### ●斎藤委員

若いディレクターを大事にしながら、(熱を)冷ますということではない。本人や近い関係者だけでない取材を積み、本当に番組に(当該企画を)出して大丈夫なのかという作業を上司がやってもよかったのかとは思ふ。

##### ●情報センターCP

意見書にはデスクやプロデューサーが止めるべき問題とあったが、自分は約10年プロデューサーをやっているもののゲートキーパーとして止められたかと言うと自信がない。検証・反証番組をやるときには、そこで一つ問題を想定し、それに関わる色々な疑義を呈し、反論権の担保や事実の精査などきっちりやらなければいけないという意識が反射的に働く。

しかし、ハンディキャップを抱えているような方が苦勞しつつそれを乗り越えて新たな希望を呈するというような良い話では、検証の視点を落としがちになる危険性がある。実際やっけていてもそのような危険性を感じていて、どう、良い話の落とし穴に落ちないようにするか、熱くなっているディレクターをどういう観点で冷ましていくかということは非常に重要だと思っている。引いた立場からどのように落とし穴に気づくことができるか、ディレクターに対し何をアドバイスしたり、確認していけばできることなのか考えないといけない。もう1度原点に立ち返って考えていかなければいけないと感じた。

●「モーニングバード」曜日チーフ

ディレクターとして意見書の内容について妥当だと思った。取材していて気づくことができたかと言われたら自信はない。放送されたVTRを見て、第三者の評価がなく、母親のインタビューもないなど、今違和感を覚える点はあったが、制作時に真実に気づくのは難しかったと思う。今後も起こりうる問題だというのが率直な感想だ。

●「グッド！モーニング」曜日チーフ

ウラ取りについてだが、全聾ということで障害者手帳を持っており、公的機関の裏付けがある場合は難しいかと思う。作曲の場面がなかったことについては今はおかしいと思うが、当時気づくことができたかと言われれば自信はない。取材時、ウォーニングサインに気づくことができたか、レベルアップをしないといけないと感じた。ディレクターからその辺りを汲み取って判断する時間を持つことが課題だと思う。

●川端委員長

一切間違っけてはいけないなどと完璧な内容を要求しては番組は作れないと思う。むしろそれよりも、絶対伝えなければいけないと思ったことや、急いで伝えなければならぬということは伝えてほしい。そうすると、ある意味間違いは避けられない。ただ間違っけてと分かった際の対応で、今まではお詫びと訂正放送をすればよいという感じでやってきているが、それでは済まないということも是非伝えたいと思うことの1つである。

●報道局次長

ディレクターは本人が取材に応じるというところで、どう本人の凄さを捕らえていくかという方向に向かいがちである。その人がいかにすごいのか、或いは人気が出る才能はどういうところにあるのかということ、近くに、できるだけ寄り添って、取材することになる。それ故、言ってみれば取材の中でフツとおかしいぞと気づくことができるかどうか、または偶然に取材の中で向こうが見せてしまうおかしなところがきっかけになり、ということでない、(虚偽に気づくのは)現実的には非常に難しいと思う。

我々取材陣というのは、上書きで積み上げるのではなく、ゼロからどれだけその人物、事象に興味を持って、まっさらな気持ちで、対象に向かって取材ができるかということが、一番単純にして大事なことだと思った。

●情報センターCP

(真実性に関わる) 様々な問題が出てきて、少なくとも自分のような立場で心がけなけ

ればいけないのは、どこまでが確定的で、どこまでが可能性の範疇なのかということについて最終送付、放送に際する最終的な書きぶりで大分変わってくるということだ。BPOの意見書の中で謙抑的という表現があったが、やはり持ち上げるところと抑制するところのバランス感覚、その育成が必要になってくるのではないかと個人的に思う。

●川端委員長

彼の書く音楽について深く聞いたらたちまち馬脚が現れたはずである。なぜもっと彼を、自称する偉大な作曲家としてまともに扱ってあげなかったのかなど、それよりも全壱、被爆二世、そちら側の物語ばかりどの番組も重点を置いてしまったのかなということを感じる。

●斎藤委員

良い話のときにマイナスの部分まで取り上げることはなかなかできないし、現実になのだが、それでもその人のことを取り上げたいのだったら、いい所も悪い所もとりあえず全部知りたいという感覚が、取材する側にまずないといけないのだと本当は思う。それで、いいところも悪いところも取材して、悪いところの方が多いいものを誉めるわけにはいかないが、「悪いところは黙っていてやるか」と思えるくらいの相手であって初めて、褒める番組なり記事が作れる。そういうのを目指すべきだと思う。

▽報道局長より

特に近年、テレビカメラがあるからということで、逆に取材対象者の善意で、例えば100%の話を120%の形にしてしまうとか、優しくしてしまうとか、面白くしてしまうとか、そういう事例が本当に多いのではないかという気がしている。取材対象者が話していることだけに拠ると、今回のようなケースに限らず、話が若干過剰になるというケースはままたあると思う。客観的なデータ、あるいは複数関係者の話を聞くなどし、また今回の勉強会やBPOの見解を日々反芻しながら、現場の人間、プロデューサー、デスク陣は、毎週毎週の制作に取り組んでいきたいと思う。

(2) 勉強会の放送

自己検証の結果を視聴者に伝える目的で、上記の勉強会の模様を「はい！テレビ朝日で」で放送しました。

【日時】2015年5月24日（日）（午前5：00～5：20）約20分間

【放送概要】「BPO放送倫理検証委員会の見解を受けて」

## 5. 終わりに

放送倫理検証委員会に宛てた弊社の「事案発覚後の対応についての報告書」（2014年11月）でも述べた通り、いわゆる「佐村河内氏問題」はその規模や内容においても、事態発

覚後の展開においても極めて特殊な例と言えます。問題発覚以降、テレビ朝日のニュース・情報番組では本人らによる会見や文書、その他取材等で明らかになった問題の経緯や、考察・検証など、様々な切り口の内容を放送することで、この問題を多角的な見方で検討・検証し、この問題がどんなものであったのかを視聴者に伝えてきました。その上で総括として、放送倫理検証委員会委員長と委員にゲストパネリストとして加わって頂いて、議論を行ったものです。

議論では、今回の問題は、マニュアルや具体的防止策で防げるものではないことが改めて浮き彫りになりました。一方で、こうした問題発生リスクを最小限に抑えるために留意すべき点があるのではないかとということも論じられました。「良い話の落とし穴」に警戒することは重要であり、取材陣は「上書きで積み上げるのではなく、ゼロからどれだけその人物、事象に興味を持って、まっさらな気持ちで、対象に向かって取材ができるかということが、一番単純にして大事なこと」です。

前回の報告書では「こうした（佐村河内氏問題という）ケースが存在したということを知ったうえで『(取材) 相手の話をよく聞く』ことを徹底することが、迂遠に見えて最も効果的だと考えております」とも述べました。このような取材態度に加え、今回の勉強会で挙げた留意点を念頭に置きながら日々の取材・制作に取り組んでいきたいと考えます。

以上